

の土地環境の特徴と、信仰の内容、稲荷各社の地理的立地条件との間にも、上述の地域のような土地環境と自然災害の特徴を意識した、信仰的対応や社殿配置があるのではないかと考えた。

そこで、本報では羽田地域の地勢・自然災害史・七福稲荷に受け継がれてきた信仰の内容を調査し、以下三点について考察する。考察内容は、①自然災害への宗教的対応、②中流域での調査との比較、③大田区ハザードマップからみた「羽田七福いなり」についてである。

祭礼行事を媒介とした復興支援のゆくえ

板井 正吉

本研究は、宗教と災害とのかかわりについて「宗教と社会の互恵性」の視点から、その〈適正值〉を求めようとする試みである。発表者の関心は、宗教と災害をテーマにした先行研究が宗教者や宗教教団の活動といった直接的でかかわりの〈強い〉関係性に注目してきたのに対して、ごく一般的な災害・復興支援を続ける市民活動団体の活動から、いわゆる間接的で〈弱い〉関係性にある。そこで、このたびの東日本大震災以降、発表者は岩手県山田町を支援する三重県内の市民活動をアクションリサーチしてきた(拙稿「山田のご縁は支援の動機になるか―神道文化が新たな絆を生み出す可能性」『現代宗教二〇一二』国際宗教研究所、二〇一二)。

本発表では、発災から一年半を経過した最近になって、遠く隔たった岩手山田と伊勢宇治山田とのご縁に、祭礼行事が媒介

となったささやかな復興支援が芽生えようとしている事例を取り上げ、その可能性を考察するための若干の仮説を立ててみたい。

まず、岩手県山田町では、毎年九月に山田八幡宮・大杉神社の例祭として「山田祭」が盛大に行われ、町民のアイデンティティとして息づいている。大震災後、いち早く宮司は「祭りの復活が復興の証」として二〇一一年九月には「山田八幡宮・大杉神社復興祈願例大祭」を挙行した。また山田祭をふたたび実行委員会が二〇一二年三月に町民を対象に実施した「郷土芸能と観光資源に関するアンケート調査」(平成二三年度文化庁地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業)において、山田町の復興において「山田祭」復活の優先度は、「非常に高い」「高い」と答えた方が七三%であった。

次に、三重県伊勢市では、伊勢神宮の二〇年に一度のご遷宮を頂点としながら、お木曳きやお白石持ち行事などを通じて神領民としてのアイデンティティを継承している。二年前からは伊勢神宮での毎年の神嘗祭にあわせて、神嘗奉祝祭「祭りのまつり」を開催し、全国各地の約二〇団体ものお祭りが伊勢の地に集合して様々な郷土芸能を披露している。

さて、山田祭、神嘗奉祝祭と、それぞれが地域のアイデンティティとして継承しつつも、地理的文化的に「隔たった」両山田の祭礼行事は、当然のことながらこれまで接点を持つことなどなかった。ところが、東日本大震災により、偶発的に伊勢市の市民活動団体が、山田町を支援することとなり、そこからご縁を深めてきた関係者同士が、山田祭の郷土芸能を伊勢の神嘗

奉祝祭にお招きすることを企画したところ、山田祭関係者から「ぜひ伊勢神宮で奉納をしたい」という思いを引き出し、二〇一二年一〇月に初めて伊勢の地で山田獅子舞が演じられることが予定されている。

以上のような経緯を踏まえて、今回の事例を宗教と社会の互恵性の視点から、復興支援における祭礼行事の可能性として考えると、「隔たり」による「つながりの弱さ」がゆえに、何かのきっかけによって、その関係性を強めていくことができているのかもしれない。すなわち、ソーシヤル・キャピタル研究において重要な理論の一つであるグラノベッターの「弱いつながりの強さ(strength of weak ties)」から今回の関係性への展開を解釈できると考える。

今回の事例では、それぞれの文化的アイデンティティが「弱いつながりの強さ」として復興支援のゆくえに何らかに可能性をもつとするならば、そこから祭礼行事のもつ〈適正值〉が見出せるのではないだろうか。

(本発表は、皇學館大学篠田学術振興基金「祭礼文化の交流による復興支援の可能性に関する実践的研究」による研究成果の一部である。)

イスラーム系NGO・HFによる東日本大震災支援活動

嶺崎 寛子

本発表は、国籍としてはパキスタン系・宗教としてはイスラーム系の国際NGO、ヒューマニティ・ファースト(本部ロンドン、日本支部名古屋。以下HFと表記)が東日本大震災に際

し、宮城県仙台市および石巻市の避難所で行った炊き出し等の支援活動を紹介し、その意義を分析することを目的とする。

HFを取り上げる理由は以下の三点である。①イスラーム系NGOが行った支援の中では最大規模で、被災地入りが早く、石巻市立湊小学校避難所では九月の避難所閉鎖まで支援するなど、継続的な支援であること、②被災者への取材が可能で、総合的な観点から支援を分析できること、③後述するHFの持つユニークな性格が、異文化理解や共生を考える上で重要な示唆を与えてくれること。本発表は今年五月から現在にかけて、文化人類学的手法を用いて行った現地調査で得た資料に基づいている。

今回の震災では、国際NGOなどが現地入りすることで、被災者と支援者の「必要に迫られた/強制的異文化交流」が被災地のあちこちで、今までにない規模で発生した。その中には成功例も失敗例もあるが、HFの事例は、互いに理解を深めた、際立った成功例のひとつではないか。震災支援を通じて、いかにHFと被災者・日本人ボランティアたちが相互理解を築いていったか、そのために必要な条件は何だったのか、検討したい。

HFはアフマディーヤ教団が一九九四年に設立した国際NGOで、九五年に国連に認定された。母体であるアフマディーヤ教団は一八八九年、ミルザー・グラーム・アフマド(一八三五―一九〇八)が北インドで創始したイスラームの改革復興を唱える教団である。インド・パキスタンの分離後は本拠地をパキスタンに置いた。創始者ミルザーが自らを「約束されたメシア」と見なしたこと、極端な平和主義等が教義の特徴だが、創